



【小さな事の大切さ】

今日の聖書の本文：詩篇78編70-72節/ 暗唱聖句：ルカの福音書16章10節

説教：鄭南哲牧師

(Rev. Jung nam-chul)

今日の聖書の本文には小さな事を大切に祝福されたその人の話が出ています。みなさんもよくご存知のダビデの話です。彼の心には統一王国への夢とビジョンがありました。しかし、彼は羊を飼う羊飼いにすぎませんでした。そんな彼がどうやって一つの国を治める王になったのでしょうか。ダビデは神様から選ばれました。いつ、どんな時でしたか。今日の本文によると、彼がだれも見えてない、注目もされてない羊飼いとして野で誠実に働きながら、神様の御言葉を黙想する日々を送っていた時でした。任されていた羊一匹、一匹を愛しながら、大事にしながら、羊の命を狙って来るいろんな猛獣から命をかけて羊を守ろうと戦っている日々の時でした。

その時、神様はダビデを小さな羊の群れの代わりにイスラエルの民族を飼う国の牧者とさせていただきますのです。ダビデがわずかな仕事に誠実をつくした時、神様は彼にさらに大きい仕事をまかせて下さったわけです。

神様の御国のために、神様の栄光のために、主の教会のためにさらに大いに用いられる人生となりたいなら、まず、小さな、わずかな事が大事である事、これも、またもう一つの信仰の逆説的な真理ではないかと思えます。逆説とは我々には矛盾しているように見えますが、そうでなく、実は真理となっていることです。

すると、今日の聖書本文を通して心に刻むべき教訓は何でしょうか。私たちはどうすべきでしょうか。聖書はこう教えて下さいます。

まず、小さな事に忠実であるべきです。

私たちはよく自分が思っている大事な事と、わずかな、つまらない事があると分けて思い込んでいる時が多くあります。

一般的に大きいことと関連して、目にみえる仕事、めだつ仕事、ほかの人の前に立つことには心をよくくばり、熱心であっても、目に見えない事、わずかな事、自分の事ではなく、ほかの人のために仕える仕事などにはよく後回しをしながら、適当に、いいかげんにする傾向があるのではないのでしょうか。

しかし、我々が覚えるべきことは聖書では神様において大きい事と、小さい事は区別がないと教えていることです。それはただ人が決めて、思っている基準であって神様は違ふとよく教えて下さっています。これをよく表してくれる代表的な話があります。

我々がよく知っている**マタイの福音書25章**に出ているタラントの例え話です。

主人が遠く旅をする前に三人のしもべたちにそれぞれ5,2,1タラントをあずけます。

いつか、申し上げたと思いますが、タラントというとても小さいお金の単位に感じられますが、当時は大金の金額でした。当時、1タラントだと約20年間の賃金(ちんぎん)でした。ですから、5タラントだとすると、おそらく100年を暮らせるほどの金額ではありませんか。5タラント預かったしもべはそれでさらに5タラントを残しました。帰ってきた主人が彼にどんなことばでほめていましたか。

“わたしがあなたに大金を預けたら、あなたはまた大金を残した。”と言いましたか。違いますね。“**あなたがわずかなことに忠実であってよくやったので、あなたにさらに多くのものを預けよう。(21節)**”と言ったのではありませんか。5タラントより少ない2タラント預かったしもべがまた2タラント残した時、主から5タラントを残していたしもべと同じくほめられました。私はもし自分に預けられた一タラント少ないと思わないで、それを大事にし、忠実に働いた結果、もしも残した結果もなく、却って1タラントさえなくなるとしても、決して叱られなかったと思います。しかし、一タラント預かったしもべは自分に預けられたものはだった一タラントにすぎない、少ない、小さなつまらない物だと比較しかんがら否定的に思い込んで、何もしようとせずに地にただ埋めてしまったから叱られたわけではないのでしょうか。

そのタラントの例え話を通して教えられる事は何でしたか。神様にとってどのぐらい残したのか結果とか、どのぐらいタラントを持っているかではありません。ここで大事な神様の観点の基準は何でしたか。

大きい仕事と小さい仕事、大事な事、大事じゃない事のように分けるものは我々、人であって、全能の神様の観点としては大きいことも、小さいこともありません。大事なものはそれが大きいことか小さいことかではなく、主からたくさん預かったのか、少なく預かったのかでもなく、あずけられたその事に対する大事にしながら、忠実に、誠実に働いたのかどうかが重要である教訓ではないでしょうか。自分の物は何一つなく、すべてが神様から預かった事に対して今まで我々はどれほど大事に、誠実にやって来ているかそれが神様の評価基準であり、御覧にされたい焦点である事をもう一度心に刻んでおきましょう。

神様から預かっている一日という時間、一度しか許されてない一生、命、健康、永遠に残す事のできない一時的に預かっているお金など、どれほど大事に、どれほど価値ある物として、感謝を持って使って、それを用いて働いて来ているのでしょうか。

例え、アメリカを建国(けんこく)した清教徒のクリスチャンたちは自分たちは神から頂いた事について二つの大事な責任あるとを強調しました。一つは、神様に頂いた事を大事にし、いつも感謝を捧げるべき責任であり、もう一つは、神様から預かっている物がすべて自分の物ではないため、困っている隣人に分け与えるべき責任があるのだということでした。そのため、清教徒クリスチャンたちが建国したアメリカでは、自分の財産を分け与えるため社会や教会に還元(かんげん)した事が今日至ってはクリスチャンであっても、そうではなくても一般化になって定着している寄付する文化の始まりであります。

例え、ビルゲイツ、パフエジット、カーネギー、ロックフェラー、ヘンリフォードなど、私たちがよく知っている人たちは、お金を稼いだだけではなく、それを豊かに分け与えた人たちでもっと有名な人たちです。彼らは、自分たちに財産を築き上げさせてくれたのは自分だけの力ではない事を覚え、教会の家族や市民のために感謝の心を表して、教会や地域の福祉施設である図書館や学校、孤児院、老人ホームなどを建てて、神様だけではなく、周りの人たちにも分け与えながら感謝を表したのです。それはすべてアメリカの国が始まるごろの清教徒クリスチャンたちが神様から頂いた事を大事にしつつ感謝を表した事がこの2つの責任を保つ事でした。

今日もこの精神はアメリカの国の根本と土台になり、今日までその信仰と精神が流されているのではありませんか。神様は、とても小さな私を選ばれ、小さな私を愛され、小さな私を喜ばれました。世界のすべてのことは、小さなことから始まりました。ですから小さな感謝、小さな愛、小さな仕え、小さな分かち合い、小さな祈り、小さな実践、小さなことを大切に思われる心が神様の御心であると信じます。今みなさんがどう思っていますか。みなさんが思っている小さな事に見える事やささやかな事に見える事、わずかな事でも、自分の事ではなくても、主のために大事に、忠実にする事が主からほめられ、祝福され、さらに大いに用いられる近道である事を共に一生心に刻んで覚えて実践していただけますように祝福します。

もう一度今日の本文の詩篇78編の71-72節を読んでみましょう。

“乳を飲ませる雌羊の番から彼を連れて来て、御民ヤコブとご自分のものであるイスラエルを牧するようにされた。彼は、正しい心で彼らを牧し、英知の手で彼らを導いた。”

この箇所では神様がダビデを選ばれた理由が分かります。忠実に、信頼できるように羊の群れを飼っていたダビデを御覧になっている中、神様は彼にイスラエルの民族を預けられたことです。そうしたら、72節の証言のように彼は自分の羊を飼っていたときのような誠実さで自分の民族を導く指導者となったとのこと。

ルカの福音書16章10節に、“小さい事に忠実な人は、大きい事にも忠実であり。”という御言葉の大切な真理を私たちは覚えなければなりません。

私たちがどんなに大きい事を好んで、大きい事をしようと挑戦してもそれを成し遂げる力と知恵は小さい事への誠実さと忠実さにあることです。ここから大きいことが始まります。だれよりも、クリスチャンである我々がまず、信仰生活において、そして特に今日礼拝の後、信徒総会でいろんな奉仕者を決める時にもこのような信仰の姿勢をもう一度大事にもって行きたいと願います。

また、今日聖書の本文によると、小さな事をする事の大切さについてどう教えられていますか。

二番目、わずかなことでも忠実で続ければ卓越になるからです。

今日の聖書の本文72節を読んで見ますと、ダビデはイスラエルの民を導く時に、忠実さとともに‘英知の手で彼らを導いた’と記されています。ここで英知という言葉はいいかえると、英語の聖書の翻訳としては‘skillful’つまり、‘技術的’という意味で使われています。現代の言葉でいうと専門的という言葉です。ダビデはただ羊を飼う小さなつまらないように見えた仕事であっても続けて忠実でやっているうちにいつのまにかに羊を飼う分野では技術的にだれにも負けないほどの専門性を発揮することになった事が分かります。だれも羊を飼って事が将来イスラエルの王なるために必要な何の関係もなく、大事な仕事だったとは全く思いもしなかったはず。事実、ダビデは羊飼いの時、すばらしい王様であり、信仰の人物となるため必要なすべてが整えられたわけ。だれが認めてくれても、そうじゃなくても長年羊を飼う働きに忠実に続けて来た結果、彼は今日の言葉で言う専門家、プロになっていました。

動物であっても命ある物を命をかけて大切に、守ろうとした愛の心と姿勢、多くの羊にどう心を配り、導くのか、あちこち野で働きながら自然や地形をよく利用する事ができる智恵と知識、毎日合間合間に弾いた琴(こ)は後サウル王の前で専門演奏者で弾けるほど専門音楽家にもなりました。剣も槍もないままで自分より高いし、力を持ってほえて来る熊や猛獣たちに対してどう戦って、勝利することができるのか何度も危険な状況に追われながら自然に訓練され、ついにペリシテの巨人将軍であったゴリアテを倒せ、イスラエルの一番の勇士となられます。そして、何よりも神によって造られた美しい自然万物の中で日々神様を賛美し、黙想しながら、歌った彼を用いて神様は旧約聖書の中詩篇という御言葉を残るのに用いられました。

例え) 1万時間の法則という話を聞いたことがありますか。世界で一番影響力を持っている経営思想家10人の中で一人であり、クリスチャンであるマルコム・グラッドウェル(Malcolm Gladwell)と言う人はこれまでの著書(「第1感「最初の2秒」の「なんとなく」が正しい(2006)」、「ティッピング・ポイント(2000)」(いかにして「小さな事」が「大きな変化」を生み出すか)などいずれも世界で200万部超の大ベストセラーになっていて、いま世界でもっとも人気のあるコラムニストであります。最近彼が書いたもっとも世界で注目と人気となった本「アウト라이어(2009作):天才! 成功する人々の法則(2014)」の中に各分野でもっとも成功した人たちの共通点として見つけ出した事がこの1万時間の法則でした。

つまり、1万時間と言うのは毎日三時間ずつ持続的に努力しながら、10年間やると、その分野にプロになり、卓越した者になるという事でした。それに記者出身である彼はその本の中でいろんな実例(じつれい)を並べていますが、例え、1990年代アンダスエリクソンという心理学者がドイツのある名門の音楽学校バイオリン専攻学生たちに対してその才能と努力について実験を行いました。その学生たちを三つのグループに分け、Aグループは優れた演奏家として実力と才能がある学生たちで、Bグループは普通のレベルと実力を持っている学生たちで、Cグループは仕事として演奏家には難しい学生たちで分けました。通用音楽分野はどこの分野よりも天性的な才能が重要な分野と言われているのではないのでしょうか。

ところが、3つのグループみんな5才ぐらいから、バイオリンをはじめましたが、時間が経てば経つほど、14才ぐらいになってからグループごとで大きく練習量が違って来ました。結局優秀なAグループは20才になるまで、総1万時間ぐらいを、Bの普通のグループの学生たちは約8000時間を、Cのグループは4000時間ぐらい練習していた事が分かりました。

この実験の結果、天性的な才能で決まるだろうと思った音楽分野でも結局通常の努力と練習によって勝負がつき最終の実力を決めるという事でした。著者はこの出来事からはじめ、いろんな実例を出しながら、成功するためには‘一万時間の法則’が必要であるということでした。

今すぐは関係なく、何の意味があるのかも知らず、ただ目に小さな事、つまらない事、わずかな事で見えても、持続的に忠実で

やって行けば、1万時間が経つとその時からはかならず、専門的になり、卓越したプロとしてなんとなく用いられる話で、確かに今日の聖書のダビデの姿の話ではないでしょうか。マルコム・グラッドウェル(Malcolm Gladwell)という人が書いたベストセラーたちはほとんど聖書的であり、聖書を読んでいるうちに小さな事を大切さをすでに教えられたのではないのでしょうか。実は日本にはまだ紹介されてないですが、今年出てもうベストセラーになっている彼の新刊本のタイトルが「David and Goliath Underdogs, Misfits, and the Art of Battling Giants」というちょうどダビデとゴリアテの内容で、どうすれば、弱い立場の人が勝つ事ができるのかについての本で是非みなさんにもお勧めしたいと思います。このように小さな事でも忠実であれば、卓越になり、さらに神様に用いられる機会が与えられるので、もっとも大切ではないでしょうか。偉大な人は小さな事に忠実な人です。

三番目に、ちいさい事でも喜びと感謝を持ってやりましょう。

さきほど、私たちはダビデが王位に着く前、羊飼いのとき、羊を飼う事から誠実に、忠実にやっていた結果ダビデは卓越になり、将来大いに用いられた事は分かりました。最後にダビデがこれらのことをどんな心で、気持ちでやったのか短く考えて見たいと思います。私は何の疑いもなく、彼が喜んで、楽しく、感謝を持って羊を飼っていたと信じます。

その証拠は神様がダビデを通して残して下さった数多くの詩篇を見ると分かります。

多数の詩篇はダビデによって書かれ、そのなかの多くは彼が羊飼いの時書いた詩篇です

彼はたくさんの詩を書き、立琴をひきながら感謝と賛美をしました。実際に聖書は彼が立琴で賛美する時、‘喜んで’歌を歌いつつ演奏したと記録しています。詩篇150篇の中“喜び”という言葉が94回も出ていますし、“感謝”という言葉も55回も出ています。

“私は心を尽くして主に感謝します。あなたの奇しいわざを余すことなく語り告げます。(詩篇 9:1)”

“私は、あなたを喜び、誇ります。いと高き方よ。あなたの御名をほめ歌います。(詩篇 9:2)”

“主は私の力、私の盾。私の心は主に投げ頼み、私は助けられた。それゆえ私の心はこおどりして喜び、私は歌をもって、主に感謝しよう。(詩篇 28:7)”

“立琴をもって主に感謝せよ。十弦の琴をもって、ほめ歌を歌え。(詩篇 33:2)”

“そうすれば、あなたの民、あなたの牧場の羊である私たちは、とこしえまでも、あなたに感謝し、代々限りなくあなたの誉れを語り告げましょう。(詩篇 79:13)”

ダビデは労働の中でも感謝を持って歌いながら、楽しんでいました。一人で臭い羊たちを面倒見る事がどうしてそんなに嬉しくて、楽しんでる事が出来たのでしょうか。その中で今神様が自分にこれでも下さった事に対する感謝と自足があり、一人ではなく、いつも神様との交わりがあり、賛美と祈りがいつも共にあったからではないでしょうか。

“[詩篇 52:9] 私は、とこしえまでも、あなたに感謝します。あなたが、こうして下さったのですから。私はあなたの聖徒たちの前で、いつくしみ深いあなたの御名を待ち望みます。”

神様は羊飼いであるダビデが感謝と喜んで忠実に羊を飼うことを喜び、彼が同じ喜びをもって彼の民族を導くだろうと判断されたのです。つまり、小さな事でも、ささやかな事でも神はつづやく者、否定的な者を用いられない事を嚴重に受け止めなければなりません。“(コリント人への第一の手紙 10:10)また、彼らの中のある人たちがつづやいたのにならつづづやいてはいけません。彼らは滅ぼす者に滅ぼされました。”小さいことにも楽しめる人は大きいことにも楽しめる人です。

創世記2章から読んでみると、本来は労働自体が罪の結果ではなく、罪の結果、人が楽しむべき労働が辛い労働に変わってしまったのです。それが墮落したアダムに与えられたもう一つの罰だったのです。“あなたは、一生、苦しんで食を得なければならぬ。”(創世記3:17)ここをヘブル語でみると、苦しい労働の意味が含まれています。楽しむべき労働が苦しい労働に変わったのは人間の罪による墮落の証拠です。ですから、今日も働きたがらない我々の姿から墮落の症状(しょうじょう)が見られるといっても過言でもありません。

愛するみなさん!救いを言い換えると回復だとも言えます。すると、救われた聖徒たちに働き事に対するどんな変化がみいだされるのでしょうか。仕事を苦しみの中ではないけません。未信者たちとは決して比べられない主を待ち望みつつ、感謝と喜びをもって今自分がやっている事に楽しんでやり続けなければなりません。職場でも、家でも、学校でも、主の教会の中でもどんなにわずかな事でも神様から預けられた事としてやりとげていきましょう。この世で一番かわいそうな人は‘死ぬほど苦勞しつつ働きながら、結局本当に死んでしまった人’ではないでしょうか。

もう一つ付け加えますと、マルコム・グラッドウェルは1万時間の法則の本の中で同じく1万時間を努力しても、卓越になる人もおれば、そうじゃない場合の人も出るのはなぜかについて、彼は‘悪循環’のためであると指摘しました。つまり、悪循環というのは、無理やりにやりながら、惰性(だせい)に流されて何の意欲もなく、仕方なくやっている事なら、1万時間じゃなく、10万時間をやっても偉大さに至る事は決して出来ないと言う事でした。小さな事でも感謝と喜びを持って忠実にやっている者を神はさらに祝福し、用いてくださる事を共に覚えて行きましょう。

愛する信仰の家族のみなさん!我々が救い主として信じているイエスキリストこそちょうど今日の御言葉内容の一番ふさわしい模範となって下さいました。人類の贖いのため御代わりに十字架を背負って下さったイエスキリスト御自身も3年間のお働きの前に、30年間陰で肉の父であったヨセフを助け、大工の仕事をしながら誠実に働いて下さる模範を見せて下さいました。イエスキリストが大工として誠実に働いて下さったように十字架を背負う贖いの御わざも誠実に成し遂げられました。十字架の道に向かって行かれた時も、“天の父が働きますから、私も働くのだ”と告白されました。今与えられた小さな事でも忠実に、そして感謝と喜びを持って働き、仕えていく内に優れた主の者としてますます用いられるクリスチャンプレイズチャーチの大家族となりましょうように切に祈り祝福します。アーメン!